

方ヲ載ス、然レドモ老テ鬚髮ノ白クナルハ常也、何ホド烏髮ノ藥、及酒藥ヲ服シテモ、多ハ黒ニ變ズルコト少ナリ、諸書ニ白髮ヲ染ノ藥方ヲ載セ、或ハ藥肆ニ販グ、其應驗如神、サレドモ染テ黒メタルモ旬日ホド經レバ、其髮根ノビタル所白キ者也、老テ鬚髮ノ白クナルハ、血ノ潤澤枯涸スルノ事ニシテ、冬ニ成テ草木ノ枯槁スルニヒトシケレバ、何ホドノ水ヲソ、ギ培養シテモ、冬枯ル所ノ草木ニ益ナキニ等シカルベシ、總テ人父母ヨリ稟受スル所ノ形體、自然ト厚薄アル者ニシテ、其衰ル所モ薄キ所ヨリ始ル者也、是故ニ或ハ目ヨリ先ニ衰ル者アリ、齒ヨリ先ニ衰ル者アリ、耳ヨリ先衰ヘ、髮ヨリ先衰フ者アリ、是ヲ以テミレバ、鬚髮ノ白コト、病トナシテ治スルニ及マヅキコト也、壯年ノ人髮中ニ白髮少々生ズル者アリ、和俗若白髮ト云、是不治シテ可也、四十許ヨリ鬚髮白キ者ハ、血虛腎虛ニ屬スレバ、八味丸等ヲ用ベシ、諸ノ方書ニ烏鬚髮ノ藥方載ス、可參考

〔南嶺子〕古來は鬚髮悉剃を僧形とす、日本書紀、古人大兄皇子詣於法興寺、佛殿與塔間、剔除鬚髮、被著袈裟と見へ、同紀、天武天皇いまだ大海皇子とて、東宮の時、天智天皇の疑ひを散せんとて、剃除鬚髮とありて、ひげかみと訓じたり、因果經曰、過去諸佛、爲成就無上菩提故、捨飾好剃鬚髮、云々、然るに今世の僧信を售んために、わざと鬚をのばし、頭は僧、鼻より下は俗髻をかざる、賴政の射られし鶴といふは、形の定らぬ物の名といふ説も侍れば、かゝる類もその部に入べきか、

作髭

〔還魂紙料上〕懸髭

昔の男子は髭を好、その際の美しからんことを嗜がゆるに、常に毛拔をはなたず、既に客を招請するとき、烟草盆に毛拔をそへて出し、とぞ、是を書院毛拔と云、書院毛拔の名、下に引し四季は、西鶴置土産に見えたり、されば髭なき者は、墨にて髭を作りし遺風、近年まで町奴といふものにありて、よく人の知るところなり、又一種懸髭といふ物あり、是は紙にて髭の形を製、紙捻にて耳よりかけて、編笠を打かぶり、遊里へ通ふ者などが、人目を忍ぶ便としたるものなりとおぼし、四季ばなし、貞享年一の間印本の